様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２９ 年　 ６ 月　 ６ 日現在

機関番号：１４６０２
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2013～2016
課題番号：２５３７０２１７

研究課題名（和文）分析書誌学と出版史的方法による近代日本における書物の制度化の解明

研究課題名（英文）The elucidation of the standardization of books in modern Japan by analytical bibliography and the method of publication history

研究代表者
鈴木　広光（Suzuki, Hiromitsu）

奈良女子大学・人文科学系・教授

研究者番号：７０２２６５４６

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,700,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、明治初年に西欧活版印刷術が導入されて以降、版面および書物を構成する諸要素が整備され、書物の標準的なフォーマットが確立するまでの過程を明らかにしようとするものである。(1)明治期に明朝体活字と平仮名活字とが組み合わせて用いられるようになったことで、江戸時代の板本の印刷書体が有していたジャンルや文体との関係が崩された。(2)句読点の使い分けが行われるようになったのは、外国語の翻訳や新たな書き言葉の模索など、言語そのものと向き合う最前線の場においてであった。(3)紙型は一般に活字印刷の弱点である原版の保存を補填するものと考えられているが、明治前半の活字印刷では異版を生成する装置でもあった。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this research is to demonstrate the process until elements constituting the printed surface and the book has prepared, and the standard format of the book has established.(1) The combination of Min style type and Hiragana type let down the relationship between typeface of woodcut book in the Edo period and genre, style. As a result, this combination became the standard typeface in the type print books since the latter half of the Meiji era.(2) The use of punctuation marks came to be done at the forefront of the field facing the language itself, such as translating foreign languages and exploring new written words.(3) In general, the replication technique called shikei (paper type) is thought to compensate for preservation of the original which is a weak point of typographic printing, but in the case of type printing in the first half of the Meiji period, it was also a device for generating different editions.

研究分野：日本印刷史

キーワード：日本文学　分析書誌学　出版史　活字印刷　活字書体　句読点　紙型

１．研究開始当初の背景

明治期に西欧式活版印刷術が導入されて以降、書物の大量印刷が可能になり、出版活動も盛んになったが、明朝体活字の日本への導入と改刻を明らかにした小宮山博史、府川充男、本研究の研究代表者（鈴木広光）による活字書体史研究や、浅岡邦雄、稲岡勝らによる新たな出版制度の確立の研究を除くと、明治の印刷・出版に関する研究動向はその歴史的意義の大きさに反して盛んとはいいがたい。特に江戸板本からの明治活版洋装本への物理的形態の変化の諸相、書物の形態変化とジャンルの再編成との関係、版面様式の変容と新たな様式規範の標準化の過程、それらに伴う読者の読書行為への影響などの解明はほとんどなされていない。

一方、国外では、印刷された書物およびその版面を構成する諸要素の社会的機能に注目し、テクストが読者に伝達される際に纏う物質的形態が、どのようにして意味構築のプロセスに関与するかを重視する「分析書誌学」が D・F・マッケンジーらによって提唱され、「読書の社会史」のロジェ・シャルチエの賛同も得てめざましい成果をあげている。日本ではそれらが 1990 年代に紹介されたにもかかわらず、書誌学、出版学、日本近代文学の分野で若干の言及があっただけで、実証的研究の成果をみるに至ってはいない。

このような研究状況にある理由としては、まず対象となる出版物が膨大にあり、総体を把握するのが困難であったことも一因として挙げられようが、何よりも文字（活字）とそのレイアウト（組版）の機能に着目したタイポグラフィ的知見にもとづく、記述方法が確立していなかったことが最大の要因であろうと考えられる。日本近代の書物の書誌記述項目は、すでに国文学研究資料館が文献調査用にフォーマットを定めて実用化しているが、その項目の有効性についても検討される必要があるだろう。また国立国会図書館や国文学研究資料館が明治以降の出版物の画像データベースを Web 上で公開し、総体に近い形の把握が可能になってきたので、その有効利用の方法（画像資料の限界も含めて）を模索しつつ、新たに近代活字印刷本の書誌学記述の項目及びその方法を提案したいと考えた。本研究課題の背景は以上の通りである。

２．研究の目的

(1)研究課題の「書物の制度化」とは、版面およびそれを構成する活字書体、余白、レイアウト、さらに書物の物資的形態の諸要素およびその構成のあり方が標準化されることで、読者にその特徴が強く意識されなくなることをいう。

(2)本研究は、明治初年に西欧活版印刷術が導入されて以降、版面や書物全体を構成する諸要素が整備され、基本的なフォーマットが制度として確立するまでの過程を、書物を構成する諸要素を詳細に記述し、その社会的機能まで視野に入れて考察する「分析書誌学」と、その記述を歴史の文脈において考察する出版史的方法の両面から明らかにしようとするものである。

(3)活字本の書誌学的記述は、板本書誌学で培われた分析方法や用語を援用して行なうのではなく、活版印刷技術や造本技術およびその工程と、その物質的形態によって規定される書物受容のあり方を念頭に行なわれることが望ましい。研究代表者は古活字版の書体設計のコンセプト、活字規格と組版の諸相、活字の使用状況と異本関係のあり方の解明を通じて、活字本独自の書誌記述の方法を提案してきた。明治期の活字印刷本についても同様に、書体特徴、活字サイズと判型との関係、字間などをタイポグラフィ的知見にもとづく記述とその意義を新たに提案したい。ジャンルや文体を表現するための特徴的な書体の活字や煩雑な組版がノイズとして排除され、版面の画一化、標準化の一途をたどる過程と、句読点等の約物使用の標準化およびインデントの導入によるテクストの分断と秩序化はほぼ規を一にする事態ではないかと予想されるが、これが実証されれば、明治になって登場したこれらの版面構成要素がテクストの受容を統御し、解釈を拘束する（＝情報の一義化を意図する）ようになるという点で、書物によるコミュニケーションのあり方の変化について論じることも可能になるであろう。

３．研究の方法

(1)基礎データの作成

国立国会図書館や国文学研究資料館が公開する画像データを利用して、明治 30 年代までの活字印刷出版物のタイトル、作者、序、跋、刊記諸事項、判型など項目として記述したデータベースを試作する。この試作データベースは網羅的なものではなく、書物制度化の指標を抽出するためのボーリング調査的なものと位置付ける。これをもとに明治 30 年代くらいまでの印刷所、出版社、売捌き人がどのようなジャンルの書物の印刷、流通に関与し、どのような形態を有する書物（特に版面）の製作に関わっていたのかを探る。

(2)パラテクスト的諸要素の近世板本からの変容と近代活字本における標準化の解明

活字印刷本におけるタイトル、作者、目次、章、序、跋、注などのパラテクストについて、江戸板本からの継承と変容、断絶の両面から考察して、テクストに及ぼす機能を解明する。特に言葉としてどう表記されているかだけではなく、どのようなデザイン、レイアウトで表現されているかについて注目して、変容の過程を跡付ける。国立国会図書館や国文学

研究資料館が公開する画像データベースによるボーリング調査と並行して、明治前期活字本の現物を科研費で購入するなど、出来るだけ物質的形態を確認しながら、分析を進めることにする。

(3)句読法と出版メディアおよび読書のあり方との関係の解明
　タイポグラフィの観点から、版面を構成する活字書体の種類、活字サイズ、句読点・括弧などの約物、ルビ、字間、インデント等について、書目をデータベースから選択して記述し、版面様式の標準化過程を実証的に跡付ける。ベタ組、句読点、括弧の使用やインデントについては、その使用の始まりと普及の過程を確認し、ジャンルおよび出版社・印刷所との関係を明らかにする。

(4)活字印刷術黎明期の異本、異版生成のメカニズムの解明
　明治前期の出版物では、同一または類似タイトルの書籍が出版者を異にして、数多く刊行された。そこには「版権」の有無など、制度上の問題が関わっているが、他にも現在と異なる印刷出版のメカニズムも関与していると予想される。この問題を、『明治太平記』などの通俗「歴史」書、『二十三年未来記』を分析書誌学的に、版面をはじめとする書物を構成する諸要素を詳細に分析することによって明らかにする。

４．研究成果
(1)近代日本における明朝体活字導入とこれに組み合わせる平仮名活字書体の採用は、江戸板本における印刷書体が担っていた文体、ジャンルとの関係を徐々に解体していった。研究代表者は、江戸時代には見られなかった明朝体と平仮名の組み合わせが標準化し、あらゆる本文に対応するようになることで書体から意味役割機能が喪失し、文字が情報のみを表示する機能を担うまでの過程を明らかにした。その概要は以下の通りである。
①明朝体と平仮名の組み合わせは直ちに標準化したわけではなく、和歌や和文の分野では筆勢の残る和様仮名や続き仮名の活字が混植され、ジャンルを代替的に表象させようという動きが見られた。
②活字書体からジャンルや文体の意味役割が喪失する過程で、一時期、字間がその代替的役割を担っていたことを明らかにした。特に韻文（新体詩、俳諧）にその傾向が顕著であった。
③この成果は著書『日本語活字印刷史』第 5 章「開化の軋み」（2011 年発表の論文を大幅に加筆修正）で発表した。

(2)研究代表は句読点使用の標準化の過程を、使用される媒体や情報環境の変化とともに跡付け、機能の変容を明らかにした。その概要は以下の通りである。
①句読記号はもともとテクスト享受者が書き込むものであったが、印刷時代（江戸板本）に入ると本文に付して供給されるようになった。読者層の広がりに対応したものと同時に、新ジャンルの文体提示の意味があったと考えられる。
②明治期に入って句読点の使い分けが行われるようになった文脈は、翻訳、言文一致、かな文字論、速記、日本語文法研究といった言語に向き合う最前線の場であったことを明らかにした。
③句読点の機能は、もともと論理表示と修辞の性格を合わせ持った息継ぎの指示であったが、文字から身体性や様式の持つ意味役割が失われた結果、文章、文の論理構造の視覚的表示へと変容した。これは可読性の向上を目的に行われ、その結果、黙読する読者を増加させる一因となったが、さらに改行・インデントを用いたパラグラフ明示や句読法を用いた文の論理構造の顕示といった操作が発信者によってなされることで、テクストの意味論的可能性はあらかじめ統御された形で享受者に提示されることになった。
④この成果は著書『日本語活字印刷史』第 6 章「テクストを分節するもの」として発表した。

(3)研究代表者は近代仮名活字書体の先駆的書字活動として　幕末における葛原勾当の木活字と気吹舎出版物の印刷書体の性格について論じた。抽出された性格は、(1)の活字書体の意味役割機能の喪失の前提の論理として位置づけられるものである。概要は以下の通りである。
①　『葛原勾当日記』に使用された木活字の仮名活字の書体が同時代とは隔絶し、かえって近代日本の仮名活字の性質を先取りしていることを明らかにした。同活字には左右の横線があり、盲人の葛原はこれを手がかりに収納箱の所定の場所から木活字を選んで使用した。文字は「書く」という身体的行為とそれが行われる環境（筆記用具、支持体、前後の文字との関係など）によって規制・構成されることによって具体的な字形が実現されるが、『葛原勾当日記』の印字の姿形は物質性、身体性、文脈に根拠を持たない、「切断」された文字である。葛原にとって身体性や文脈とから自由であることは、自らの表現のために不可欠であったが、その文字の本質は各字母が機能し得る最少の要素にまで収斂され、左右の横線の数という単純な弁別素性にまで還元された抽象的な記号にほかならない。すなわち、技術や環境こそ違え、現代の文字コードとデジタル・フォントの関係は、葛原の木活字における横線と活字書体のそれと同じである。
②平田銕胤が版下を書いた気吹舎出版物の仮名書体は、連綿がほとんど見られず、筆勢がほとんど消去され、漢字も仮名も各文字の

大きさが均一で特に漢字と仮名の横幅の差が小さく、後のゴシック体のように筆画の線の太さも均一に近い、デザイン化された極めて人工的な書体である。この書体は、日本語書記の伝統や規範意識、書体の類型とジャンルとの関係といった文字存立の文脈から「切断」されたものである。そこに近代活字印刷書体との共通性が認められることを確認した。
③近代活字本の版面を構成する書体の性格について、近代活版印刷術導入以前ながら端的に示す事例として、以上の成果を論文「切断の文字、あるいは〈文字〉の近代」と題して発表した。

(4) 異本、異版生成要因としての紙型
明治前半の出版における異版・異本の濫造の要因について、制度としての「版権」の問題と「紙型」の使用という二つの観点から考察した。その経緯と概要は以下の通りである。
①研究分担者（磯部）は、明治 20 年前後に東京と大阪で出版と安売り合戦が繰り広げられた『徳川十五代記』『明治太平記』の諸版本について、科研費により購入したり図書館等で調査したりした現物を詳細に分析することによって、どのような出版状況であったのかを具体的に明らかにした。その成果を論文「歴史を「編輯」する―群生する『近世太平記』『明治太平記』の内と外―」として発表した。この調査の過程で版面を精査したところ、活版印刷において複製の大量生産、活字の摩耗保護、版の保存を支える技術と一般的に認識されている紙型が、明治期前半の出版物では同一性保持よりもむしろ異本出来の装置であったことが判明した。その成果を分担者は論文「紙型と異本」として発表した。
② 研究代表者は無版権であったがゆえに、明治 19 年 5 月に博文堂初版が出版されて以降、同年 12 月までの約半年の間に翻刻本が東京や大阪などの様々な出版人によって出版された末広鉄腸『二十三年未来記』を分析書誌学の方法によって記述した。『二十三年未来記』諸版本は全て科研費で現物を購入した。その結果、正確な記述が可能になり、奥付の出版届および他の指標によって、十八種の異版が認められることが明らかになった。ただし、10 月 7 日に四版出版届が出された精文堂四版は版面を精査すると、少なくとも異なる四種類が存在することが判明する。それらは相互にどのような関係にあり、どのように制作されたのか明らかにするために、分担者の上記研究の示唆を得て、『二十三年未来記』の紙型使用の実態を台割表に対応させ、各頁を比較対照した。その結果、四種のうち一種は印刷所が異なる可能性が高く、他の三種については、紙型使用と四折の台割との対応が示す相互の異同により、作業工程が明らかになった。精文堂は三版までは異版は存在しないが、第四版でこのような措置を取ったのは、『二十三年未来記』流行の潮目の変化に気付き、粗製濫造ながら一気に売り抜けようとする思惑があったものと考えられる。この成果ついてはさらに異版がないかを確認の上、論文として発表する予定である。

(5) 分析書誌学による書誌記述を画像データベースの書誌情報に反映させる提案
研究代表者は平成 28 年度日本出版学会秋季研究発表会のワークショップ「出版史史料と図書館資料をつなぐための方法論」で、インターネット上の複数の図書館・資料館による近代出版物のデジタル画像コレクションの書誌記述項目を比較検討することによって、画像データと組み合わせた際の、個々の出版物の同定と異版関係の記述に有効な観点と記述項目の提案を行った。報告にあたっては、(4)②の『二十三年未来記』の書誌記述と分析結果を利用し、国立国会図書館の NDL-OPAC と国文学研究資料館の近代書誌・近代画像データベースの各書誌を比較、分析書誌学の観点からどのような書誌記述が望ましいかを述べた。出版物の奥付の出版・印刷・発兌・売捌の記述が出版流通史料としては活用でき、記述にあたってはこれらを新しい書誌項目として独立させるのではなく、補記に出版事項や形態事項を記述し、検索できるようにすれば、書誌として出版史料としても利用できるのではないかと述べた。同時に補記とデジタル画像を併用し、補記は簡単なコメント、詳細を画像データで確かめるというプロセスが提示できると提案した。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計４件）
①磯部敦、「紙型と異本」、『書物学』、査読無、8 号、2016 年、pp.34-40
②磯部敦、「歴史を「編輯」する―群生する『近世太平記』『明治太平記』の内と外―」、『文学』、査読無、16 巻 4 号、2015 年、pp.176-191
③鈴木広光、「普遍の文字、臨場の文字 ―印刷史から見た欧陽詢と褚遂良」、『墨』、査読無、325 号、2015 年、pp.72-73
④磯部敦、早川由美（ほか 2 名、1 番目）、「大礼記念文庫と書籍文化環境－大正大礼と奈良女子高等師範学校－」、『書物・出版と社会変容』、査読無、16 号、2014 年、pp.1-59

〔学会発表〕（計 5 件）
①鈴木広光、「出版物の画像データベース公開と書誌記述」、日本出版学会秋季研究発表会、2016 年 12 月 3 日、関西学院大学
②磯部敦、「異本流通の磁場―『徳川十五代紀』『明治太平記』を例に―」、日本近代文学会秋季大会、2016 年 10 月 15 日、福岡大学

③磯部敦、「紙型と異本―『徳川十五代記』『明治太平記』の刊・印・修―」、十九世紀文学研究会、2016 年 3 月 26 日、法政大学
④鈴木広光、「書字の論理／活字の論理」、日本出版学会関西部会、2015 年 6 月 25 日、関西学院大学
⑤鈴木広光、「句読点の近代」、二松学舎大学文学部シンポジウム「幕末・明治に於ける伝統と革新―漢学の運命―」、2014 年 11 月 8 日、二松学舎大学

〔図書〕（計 3 件）
①鈴木広光、勉誠出版、「切断の文字、あるいは文字の〈近代〉」『幕末明治　移行期の思想と文化』（前田雅之他編）、2016 年、pp.243-259
②磯部敦、勉誠出版、「職業案内本の〈近代〉、あるいは時代閉塞の現状について」『幕末明治　移行期の思想と文化』（前田雅之他編）、2016 年、pp.289-310
③鈴木広光、名古屋大学出版会、『日本語活字印刷史』、2015 年、pp.394

６．研究組織
(1)研究代表者
鈴木　広光（SUZUKI, Hiromitsu）
奈良女子大学・人文科学系・教授
研究者番号：70226546

(2)研究分担者
磯部　敦（ISOBE, Atsushi）
奈良女子大学・人文科学系・准教授
研究者番号： 00611097